

4章

【問題】(演習)

出典：内山真弓『歌学提要』／早稲田大学 商学部 06年

現代語訳

(和歌が) 高雅であるか低俗であるか(の違い)は(その和歌の)調べにあつて、用語にあるものではない。それなのにむやみに(今の時代の) 日常語を疎んじ、古語をばかり雅であると思うのは論外である。その雅な古語というのも、当時の日常語であるのに(それに気づかないのか)。どうして古い言葉を(ばかり) 追い求めて今(の日常語)を棄てる(必要がある)のだろうか。和歌はただ自分の感性心情を表現する以外はない。自分がいるところの現実(「自己の存在の現実」)をふまえないで真実味を失い、(自分の) 気持ちばかりを高遠(な次元)に馳せて、用語に華やかなもの(を選んで和歌)を飾ることで雅であると思うのは、たいへんな誤りである。そして調べには雅な調子があり、(取り立てていうこともない) 平凡な調子もある。また雅な調べにも甲乙の程度がある。その最上の調べにはとりもなおさず最上の感動がある。その最上の感動というのは直感的な感動である。(和歌を) 深く吟味し幽玄(な趣)を探し求めるということではない。これは筆で記し、言葉で表現することができないことなのでここでは問題にしない。古今和歌集など(の和歌)を吟詠して、(その感動を) 味わえる人にして(はじめて) 知ることができるものだろう。

和歌は見るもの、聞くものに関して、(自分の) 思ったままを詠むものである。だから思いで短い思ひは短歌となり、長い思ひは長歌となり、勇猛な歌も繊細な歌も自然と調べが出来上がつて、感動的にも趣深くも聞こえるものである。少しでも人の耳目に良く見せようとするとところがあつて、(無用な) 配慮(「小細工」)をすると、(肝心の) 調べが乱れないことはない。(論語にいう)「思うところが(無意味に) 古語を用い、あるいは関わりの薄い縁語を求め、(もつぱら和歌の風趣を) その古語に頼りその縁語に依存するために、(読者が) しみじみと身に沁みて感じるはずの真実味の風情は消えて、かならず造花のように(「いかにも作りもののように」) なってゆくも

のである。その極端な例に至っては、古歌の調子を剽窃し、(古歌の)意味を盗み(古歌から)言葉を取って、我が物顔に(自分の詠った風趣と)偽るものも少なくない。それでは最初は初心者を欺けるとしても、どうして(和歌を)よく知った者を騙すことができるか。(それを)考えなければならぬ(「考えてみればわかることだ」)。

和歌は日常語の精緻なものである(「日常語を用いた表現を磨き上げたものである」)。それを日常語以外で追求するのは、水のないところで魚を得ようとするのに等しい(行為である)のに違いない。したがって首を傾げて(「思慮をめぐらせて」その意味を理解し、(文献を)調べてその言葉(「そこで使われている言葉」)を知るものではない。(読者がその和歌を)吟詠すれば、即座に感得するもので、仮にも(読者が)理解できないはずのものではないのである。それなのに、今の世にまったく聞き知る人もなく、長年(和歌を)学んでいる本人でさえうまく理解できない言葉を連ね詠み、そうして(これぞ)和歌であると、誇らしげに思っているのは、思慮のないことこの上ない有様である。これは和歌とは理屈を語り聞かせるだけのものと(勝手に)思い込んで、(*古今和歌集にいうような)天地を動かす(ほどの)素晴らしい力があることを忘れている(「理解しない」)からである。ところでどの技芸も(その探求に)心を任せ、(単なる技術の追求ではなく、表現することに)思いを凝らすということになると、そのような(天地の)感応がどうしてないだろうか。しかし和歌ほど簡単で身近なものは(他に)なく、意図せずして(その天地感応の力が)顕現する効力の甚だしいものである。それはわずか数語(「短い詩型」)であって、その中で意味や道理を(語り)尽くしがたいもののものであるといっても、(表現が)精緻で(その思いが)純粹であるがゆえに、自然と言葉にできない深い趣もそのまま(その和歌の)調べに反映されて、神も人もともに聞くやいなや(その趣をも)感得するものだからである。(用語の扱いが)粗雑なものはこれに反する(「このような効果がない」)ことは言うまでもない。また最近和歌を詠む人は調べを考慮しないで(和歌を)作るものだから、言葉の足りないところには(音数を合わせるために)むやみに枕詞を置き、「けふ(「今日」)」と云うはずのところ「けふし」などと言ひ、あるいは「いつか」と言わなければならぬところで「いつしか」などと言ひ類のことは枚挙にいとまがない。このように(言葉の使い方が)粗雑で杜撰な状態で、どうして素晴らしいと感じてもらえるだろうか。同じ言葉であつても、一言の増減で、(和歌の)調べも道理もひどく変わるものである。

○訳注

古今和歌集にいうような……『古今和歌集』仮名序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武人の心をも慰むるは、歌なり」とある。

問4 『論語』「為政篇」

書き下し文

子曰く、詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思ひ邪無しと。

現代語訳

孔子が言うには、「『詩経』三百篇の詩（は種々様々であるが、それ）をもし一言で総括しろというなら、（どの詩も作者の）思うところ邪念がない」と。

解答

問1 俗言

問2 ハ

問3 ニ

問4 子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。

問5 口

問6 ハ

問7 イ

問8 口

書き下し文

今人杜詩を解するに、但だ出処を尋ぬるのみにて、少陵の意初めよりは是のごとくならざるを知らず。且つ岳陽樓の詩のごとき、

昔聞く 洞庭の水

今上る 岳陽樓

呉楚 東南に圻け

乾坤 日夜浮かぶ

親朋 一字無く

老病 孤舟有り

戎馬 関山の北

軒に憑りて涕泗流る

此れ豈に出処を以て求むべけんや。縦使ひ字字に出処を尋ね得るとも、少陵の意を去ること益ます遠し。蓋し後人元より知らず杜詩の古今に妙絶なる所以は何れの処に在るかを。但だ一字の亦た出処有るを以て工と為すのみ。西崑酬唱集中の詩のごときは、何ぞ曾て一字の出処無き者有らんや。便ち少陵に追配せんと以為ふも、可ならんや。且つ今人詩を作るに、亦た未だ嘗て出処無くんばあらざるも、渠自ら知らず。若し之が為に箋注せば、亦た字字に出処あるも、但だ其の悪詩たるを妨げざるのみ。

現代語訳

最近の人が杜甫の詩を解釈するのに、ただ(詩の中の字句の先例となる)典故を問題にするだけで、杜甫の(詩で表現しようとした)意図は初めからそういうものではなかったことを知らない。そもそも『岳陽樓』(『登岳陽樓』)の詩などは、

昔から(名水と)話に聞いていた洞庭湖(それを)いま岳陽樓に登って(眼下に見る)

呉(の地)と楚(の地)は(この湖によって)東南に分けられ 天も地も昼夜の別なく(この湖水に)浮かんでいる(かの観がある)

親戚や友人からは一通の便りも無く 老いて病がちな私にはただ一隻の小舟があるだけだ

(いまなお)戦乱が続く(私の故郷のある方角の)関所のある山々の北のあたり(故郷に帰ることもできない私が岳陽樓の)欄干

に凭れていると、涙があふれてくる

この詩はどうして（詩句の）典拠を詮索することで（詩人の詩に込めた意図を）求めることができるだろうか（、できはしない）。たとえ一字一字の典拠を調べあげたとしても、（それによる解釈が作者）杜甫の意図から離れてゆくことはますます遠くなってしまう〔「典拠にこだわると作者の意図についての理解がかえってできなくなる」。思うに後の（杜甫の詩を解釈する）人たちはまったく知らないのだ、杜甫の詩が古今の詩に卓絶している理由を、（そして）ただやはり（杜甫の詩の）一字に（他の杜甫の詩句と同様に何かの）典拠があることで（杜甫を）名人だとしているだけである。（宋代の）『西崑酬唱集』の中の詩などは、どうしてか一つで一字でも典拠の無いものがあるか（、ありはしない）、（しかし）それ〔「典拠があること」で杜甫に肩を並べようと思っても、（そんなことが）できるだろうか（、できるはずもない）。そのうえ、最近の人が詩を作るときも、また（その人の使った字句には）今まで典拠が無かったことではないのに、（その詩の作者である）ご本人自ら（自分の詩の語に典拠があることを）知らないのだ。もしその詩に対して（典拠についての）注釈や解釈を施したら、これもまた同様に一字一字に典拠があることになるが、（しかしそれは）ただその詩が悪い詩であることを妨げないだけのことである〔「その詩が駄作であることを示すだけのことである」〕。

解答

問1 イ 問2 ウ 問3 ア

問4 エ 問5 エ 問6 ア

問7 ア 問8 ②ウ ③イ

問9 ウ 問10 未嘗無出処

出典：石川淳『文学大概』／学習院大学 文学部 89年

文章略解

書かれる言葉というものは、話す言葉と違い、書き手の側の理性の吟味によりただ一つのものとして選択されねばならない。しかも書いた以上はそれきりだ。両者はまったく性格を異にするものであるから、混同してはいけない。しかし、そのことが表現の固定という滓も残した。出来合いの陳腐な型による、生理的に調子がいだけの文章だ。ただし、文章は、その発展の途上でそうしたものを重視する時期があることも事実である。

解答

- 問1 (a) ㊦ (b) ㊧ (c) ㊥

問2 言葉が吐き散らされるおしゃべりと選択される文章とは、本質的に異なる性質のものだから。〔42字・解答例〕

問3 ただ一つの表現を理性によって選択せねばならず、しかも一回的にしか書けないという点。〔41字・解答例〕

問4 針小棒大

問5 「言葉づき」と「句勢」の算段 (37行目)

問6 (ウ)・(オ)・(カ)

問1 語意説明問題。

(a)について。「それを言ったが百年目」「ここで会ったが百年目」などという形で、日常会話でも使われる。
 (b)について。本来はアの意味だったが、慣用句となつてウの意味を表す。ここは、「言葉づき」やら「句勢」やらだけが価値をもち、この二つを考えればそれで「めでたく」おしまい、という風潮を皮肉つている。

(c)について。今日（現代の価値基準に立つ視点） ↑対↓発展過程（歴史的观点）の対比の構造から考える。(イ)だと思った人があ
 るかもしれないが、世俗↑対↓歴史、よりも、今日（現在） ↑対↓歴史、のほうが正しく対立関係を形づくる。

問2 理由説明問題。家庭教師は、「貴下のげんにしやべつてゐることが散文だ」と言う。それに対して、傍線部(1)「をかしいのは

家庭教師のはうだ」と批判するのであるから、「げんにしやべつてゐることが」は「散文」ではない、ということになる。第一段落で述べられている「おしゃべり」と「書く言葉」との相違を支持する例として考えていく。冒頭の「しやべるとき、……ひとほとんど無考へでことは吐き散らしがちである」と末尾の「書くことはいつも選択されなければならぬ」とに注目しよう。

問3 内容説明問題。「書かれたことば」に該当する表現を、前後の段落から拾い、同じ内容ごとにグループに分けてみる。

〔第一段落〕			
文章	書いてしまった以上もうそれきり		A
書きうる表現	つねにただ一つに限られてゐて		B
	一本勝負だ。		A・B
ことば	かならず理性の吟味をへなければならず		C
文章	書いてしまへば百年目		A
書くことば	いつも選択されなければならぬ		C

〔第三段落冒頭〕

文章

|| 一回的にしか書くことができない

— A

後から手を加へられることができない

— A

拾ってきたものをグループに分けると、以上、三グループに分けられる。

A || 一きり

B || 一つに限定

C || 選択

それぞれの要素から解答を作成する。

問4 内容説明問題。知識問題にもからむ。針ほどのことを棒のように大げさに話をする、というところから、話を誇張することに使う。

う。ひとのうわさというものは、だんだん話が大きくふくらんでいくものである。

問5 指示語の指示内容指摘問題。傍線部(4)を含む部分(……ゐた時代)の主語にあたる「かなり学識ある人物」とは「駿台雑話」の

作者。すなわち、傍線部(4)を含む文の直前にある「ただ『言葉づき』と『句勢』の算段だけで市が栄えてゐるのだ。」を受けている。

問6 「韻文」についての筆者の考えは、27～30行目に「型を支へるものは調子であつた。調子がよいとは……生理に関係するもので、

文章は……歌ひ散らされることになる。そのせむか……すなはち韻文である。」と書かれている。この「型」とはそれ以前に書かれている「表現の固定」のことであるから、正解は(ウ)・(オ)・(カ)と導くことができる。

筆者の考えは、31行目以降、「漢文口調の文章」↓「和製漢詩」↓「韻のある雄弁」と続くが、(ア)「詩」では範囲が広すぎる。「漢文口調」という点が大事なのに、そこからはみだしてしまふ。一般に韻文にジャンル分けされるといふだけの理由で飛びつかない

ように。筆者がこの語をこの文脈でどのような意味のものとして使用しているのか、を考えなければならない。同じ理由で、(イ)「和歌」もだめ。(エ)はむしろ「散文」の側に属する。

出典：陶淵明「止酒」(『陶淵明集』)

／ 上智大学 文学部 95年

書き下し文

居止城邑に次る

坐して高蔭の下に止まり

好味は止だ園葵のみ

〔平生は酒を止めず〕

暮に止むれば寝を安んぜず

日日之を止めんと欲し

徒だ知る止むるの樂しからざるを

始めて止むることの善たるを覺る

此れより一に止め去り

清顔宿容を止むること

逍遙として自ら閑止す

歩みて華門の裏に止まる

大權は止だ稚子のみ

酒を止むれば情に喜ぶ無し

晨に止むれば起くる能はず

營衛止むれば理まらず

〔未だ知らず止むるの己を利するを〕

〔今朝眞に止む〕

將に扶桑の淡に止まらんとす

奚ぞ止だに千萬祀のみならんや

現代語訳

(私の) 住まいは町中にあり、(私は) 自然のままにのんびりとすごしている。

坐つては高い木の陰で休み、歩いては(破屋の) 茨のからみついた門の中で休む。

うまいものはただ菜園で作る青菜だけで、大きな喜びは幼い子どもことだけだ。

普段から酒を止めることはない(のはなぜかという)、酒を止めれば心に喜びがなくなる(からだ)。

夜に飲まなければ安眠できないし、朝に飲まなければ起きることもできない。

毎日これ〔酒〕を止めようと思うが、止めると体の調子が悪くなる。

(酒を) 止めるのは楽しくないことだということだけはわかっているが、まだ止めることが自分のためになるとは思い知ることもない。(しかし) 初めて断酒はいいことだと悟り、今朝、本当に止めてしまった。これからは(酒は) 完全に止めてしまい、東海の水辺に身を置こう。

(酒を止めれば) この清々しい顔でこれまでの姿を保つたまま、どうして千年の命だけに終わろうか(いや終わりはいない)。

解答

問1 A 13 B 6 C 12

問2 ハ

問3 1 11 2 11 3 11

問4 イ

問5 イ 11 B 11 B ハ 11 A 11 B ホ 11 A ヘ 11 B

解説

問1 脱文を挿入する問題。詩の前の解説文に書かれている、『一韻到底』がヒントになる。古詩、近体詩によらず、五言の場合は偶数句末に、七言は初句と偶数句末に韻を踏むのが原則であるが、古詩の場合にはもう一つのポイントがある。それは、『一韻到底』と『換韻』である。前者は、最初から最後まで同じ韻を踏み、後者では途中で韻が変わる。この詩の場合は五言で『一韻到底』だから、偶数句末にずっと同じ韻が踏まれているはずである。

従って、ずれの生じた部分の前後の句が抜けているはずである。本文の2―4―6句に「止」「裏」「子」と「i」音が続いているので、これが『一韻到底』の韻である事がわかる。ところが、8句を見ると「寝る」で「in」に変わっている。従って、6句

と7句の間が抜けている。そして、7句の「酒を止めると喜びがなくなる」と、意味の上でつながることから、Bの「普段は酒をやめない」が入ることになる。

そして7―9―11句に、「喜」「起」「理」とやはり同じ韻が続き、その後また途絶え、15句でまた復活するから、12―14句の間に残り二つの選択肢が一つおきに入るはずである。11―15句を、韻が踏んであるものを○、踏んでないものを×で表すと『○×××○』となるから、『×P×Q×』のように、P、Qの部分にAまたはCが入らなければおかしい。そこで、どちらがPの位置に入るのかをまず検討すると、Cであるとと言える。なぜならば、12句の『徒知』とCの『未知』が対句になっているのが明らかだからである。従って、残りのQの位置にはAが入る。

韻と対句。漢詩の構成を考えるときの基本要素である。なんとなく意味的に処理しないこと。

問2

詩に、その内容から題をつける問題。漢詩の意味の構成を考えた場合、主意は最後の部分に存在しているのが通例である。絶句の起承転結の構成がその典型であるが、このことは古詩、近体詩を問わない。問1で補った部分も含めて最後の方の意味を見ると、「酒を止めて、清らかに長生きしよう」といつているから、主意は「題とすべきことを考え合わせ、ハが正解となる。

問3

部分解釈の問題。

1 「居止」は「城邑」(町)の中にある。そこに詠者はいる。そして4句にあるように、茨の門の中(家の中)にいる。その位置関係を考えると、「居止」は家ということになるだろう。

2 5句と6句は明らかに対句である。そのことに注意すれば、

・ 好味は園葵 (5句)

・ 大歡は稚子 (6句)

であることがわかる。「大歡(大きな喜び)はすなわち稚子である。」という意味になる選択肢は二だけである。

3 これも対句に注意すれば、すぐわかる。8句と9句は、明らかに対句で、

・ 8句 夜に酒をやめれば安眠できない

・ 9句 朝に酒を止めれば「不能起」

← ということ対応関係になっているから、「不能起」は、安眠と対照的内容、すなわち「起きられない」という意味を表すことになる。従って、解答はイである。

問4 白文を書き下し文にする問題。

ハとニは文法的におかしい。ハの「止める」は現代語の活用形である。イとロは文法的には可能だが、13句の直前で「止」の効用（利己）を述べ、その後詠者が酒を止めていることから考えると、傍線部4の部分の論題Ⅱ主語はやはり「止」であるのが適当で、従って、選択肢のうちでは、イが最も正しい。

問5 内容正誤問題。陶淵明が酒と自然を何より愛した詩人であったことは、あまりにも有名な話。その彼が、自分が酒を飲む理由を

クドクドと言いつつながら、「禁酒するんだ」という宣言をする。しかし、酒がなければ夜も眠れないような人間がそんなにあつさり禁酒できるだろうか。できるはずがない。禁煙を実行するために部屋中に「禁煙」の張り紙を貼る人がいるが、あれと同じことを、淵明はすべての句に「止」という字を入れることによって行おうとしているのである。でも結局は禁酒できなかったはずである。そう考えると、思わずニヤツと笑ってしまえるではないか。この詩のそのようなイメージからして、適当な説明となる選択肢はハ、ホしかない。

論理的でないと思われるかもしれないが、上智の問題には、総じてこのようなものが多い。受験される諸君は心しておいて頂きたい。